一

次の文章は『蜻蛉日記』の一節で、作者のもとへ夫の訪れることが途絶えていた頃の記述である。これを読み、あとの問に答えよ。

（50点）

かくて、絶えたるほど、わが家は内裏よりまゐりまかづる道にaしもあれば、夜中あかつきと、＊うちしはぶきてうち渡るも、聞かじと思へども、うちとけたる寝もねられず、＊夜長うbして眠ることなければ、1さなりと見聞くここちは、なににかは似たる。いまは2いかで見聞かずだにありにしがなと思ふに、「むかしすきごとせし人もいまはおはせずとか」など、人につきてきこえごつを聞くを、ものcしうのみおぼゆれば、日暮はわびしうのみおぼゆ。

＊子どもあまたありと聞くところも、むげに絶えぬと聞く。あはれ、ましていかばかりと思ひて、4とぶらふ。九月ばかりのことなりけり。あはれなど、しげく書きて、

吹く風につけてもとはむ＊ささがにの通ひdし道は空に絶ゆとも

返りごとは、こまやかに、

色変はる心と見ればつけてとふ風 A もおもほゆるかな

とぞある。

注 ＊うちしはぶきて＝せきばらいをして。　＊夜長うして眠ることなければ＝「秋ノ夜長シ、夜長クシテ眠ルコト無ケレバ天モ明ケズ」（『白氏文集』上陽白髪人）に基づく。上陽人は、十六歳で後宮に入って以来、一度も帝にまみえることなく一生を終えた。　＊子どもあまたありと聞くところ＝夫（藤原兼家）の妻、時姫を指す。作者が兼家と

メモ

結婚したとき、兼家にはすでに時姫という正妻がいた。＊ささがに＝「わが背子が来べき宵なりささがにの蜘蛛（くも）のふるまひかねてしるしも」（『古今和歌集』墨滅歌）による。

問一 傍線**a**～**d**の文法的説明として最適なものをそれぞれ次の中から選び、記号を記せ（同一記号の反復使用不可）。（8点）

ア サ行変格活用動詞の連用形　**イ** 形容詞の活用語尾の一部　**ウ** 過去の助動詞「き」の連体形
エ 副助詞　**オ** 格助詞「して」の一部　**カ** 接続助詞「して」の一部

問二 傍線**1**について、次の（ⅰ）（ⅱ）に答えよ。

（ⅰ）（例）にならって品詞分解せよ。（6点）

（例）動詞 | 助動詞 | 名詞
絶え | たる | ほど

（ⅱ）傍線**1**とはどういうことを言っているのか、具体的に説明せよ。（8点）

問三 傍線**2**を口語訳せよ。（10点）

問四 傍線**3**は誰を指すか、記せ。（6点）

メモ

問五 傍線**4**は、誰が誰を「とぶらふ」のか。最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア 作者が夫を　**イ** 作者が時姫を　**ウ** 夫が時姫を　**エ** 時姫が作者を

問六 **A** に最適なものを次の中から選び、記号を記せ。（6点）

ア あやしく　**イ** ゆかしく　**ウ** ゆゆしく　**エ** わびしく

メモ